学費　その問題と闘い　第1回

学費闘争、それは学園闘争の花であった。戦後の学生運動の中で最も学生の利害に結びついた経済闘争として、幾多の学園で繰り返し闘われてきた。だが、学生の側が勝利した例は数えるほどもない。大学経営者にとっても、経営利潤をかけた闘いであるからだ。まさしく学生にとって闘いであるならば、経営者にとっても経営の死活をかけた闘いであるのが"学費値上げ"である。

すでに報道されているように本年度学費値上げは、法人当局が全面的値上げを避け、値上げを受験料だけに限ったことにより最初の山場を越した。山場を越したというのも、十二月中旬値上げ発表を見越して闘いを組織してきた学生に対して、当局は肩すかしと問題のすり変えで対応してきたからだ。

この十四日に大学当局の発表した「お知らせ」では「昭和四十七年度入学生の学費改訂は、なお一層の検討を必要とするので、これを見送ることにしました」と述べ、あたかも一切の値上げを中止したかのように宣伝している。だが実際には、六〇%の受験料値上げを同時に決めたのだ。すでに学費値上げを正式発表している早稲田、上智、青山学院、東京理科大などの大手私大と同一歩調をとらなかったのは、一つには法人評議員の改選を前にして、複雑な学内派閥政治の中で調整がうまくゆかなかったという点がある。そしてもう一つは、明らかに反対闘争の盛り上りを意識したものであっただろう。

反対闘争の昂揚に肩すかしをくわせたという点では、当局のもくろみはある程度成功したかもしれない。しかし、現在のひっ迫した本学の財政の中では、値上げの「見送り」は単に「短期決戦」を避けたにすぎず、授業料、入学金の値上げは既定の方向と見るべきだろう。大学当局は時期を見ているにすぎないのだ。

本学においては、前回の学費値上げ（四十一年値上げ発表）に際して「明大学費闘争」として学生運動史上に残る闘いが組まれた。それは「早大学費闘争」（四十年値上げ発表）・「中大学費闘争」（四十二年値上げ発表）の間にあって、当時の「三派全学連」の結成と相まって、その支援のもとに闘われた。後の「全共闘」の萌芽的闘争形態をもつ学園闘争の一つとも言われる。だが、明大学費闘争の幕切れはあまりにもあっけなく、陰湿なものであった。六十日以上にわたって闘い取られていったバリケードストライキも、「全学闘」執行部のいわゆる「ボス交」の中であっけなく崩れ去っていった。

現在本学においては、学費値上げの一部として行われる受験料値上げに対して反対闘争が組まれようとしている。しかし、いまだ闘争の大衆的基盤、値上げ問題に対する論理性は充分ではない。本紙編集部では、シリーズとして本学の財政問題、四十一年明大学費闘争の状況を追う中から、学費問題の本質に迫ってゆきたいと考える。

経営改革委員会の最終答申が出されたのは本年九月である。この中では相も変わらぬ経営状態の悪化が述べられ、教育ヴィジョンにもとづいた経営の抜本的改革にはほど遠い、小手先での増収案がいくつも示されている。そして、最も容易で具体的な増収方法として学費の値上げが暗示されている。昭和四十二年度の前回学費値上げが敢行されてすでに五年が経過している。最初の学費値上げ年次に入学した学生がこの四月に卒業した。これまで毎年、新入生の授業料、入学金の増収分だけ増加してきた本学の財政収入も、四十六年度以降、授業料、入学金収入の横ばい状態から、年々膨張してゆく財政は借入金でまかなわれざるをえなくなる。ここで常に赤字財政を切り抜ける手段として学費値上げが問題にされてくる。

この五年間に大学の経営は本質的に変化してきたであろうか。経営主義的な大学の在り方に変化があっただろうか。こいった疑問に対して否定的解答しか与えられない限り、将来に対して悪循環的な学費の値上げが繰り返されるばかりだろう。現に大学当局の発表したように本年度の「学費改訂を見送った」とするなら、それは来年度行うといった意味しかもちえない。この十二月十一日の生田における団交で田中副学生部長の公表した「本学の現状と課題——当面する財政問題の理解のために——」と題する小冊子は、この間大学当局の発表したものの中では最も具体性に富んだ資料であった。それだけ学費値上げが大学経営者にとって切実なものとなっているともいえる。今回はシリーズの第一回として本学の財政状況を追ってみたい。

年々増大する借入金

まず、この間の学費値上げの変遷を追ってみよう。

昭和三十八年には、それまでの三万円の授業料が五万円に六〇%値上げされた（文科系のみの値上げ）。続いて四十年には受験料が一〇〇〇円ずつ値上げされて、七学部が四〇〇〇円から五〇〇〇円に、短大・大学院が三〇〇〇円から四〇〇〇円になった。四十二年の学費値上げは入学金が三〇～五〇%、授業料が平均六〇%引き上げられた（資料I参照）。この年同時に再履修料、証明書手数料、教職課程・学芸員養成課程の実習料なども値上げになっている。

前回、四十二年度の学費値上げに際しては、一年以上前から様々な形で赤字キャンペーンが行われてきた。四十一年十月に出された「学生諸君へ——本学財政の現状について——」と題するパンフレットによれば「四十一年度経常部予算では一億八八〇〇万円の借入金が生じている」という。しかも「学費を値上げしない場合、不足金の増大は四十二年には四億三八〇〇万円となり、四十五年には約三〇億の累積赤字が生じる」というのである。また「臨時部の借入金は年々累積してきている。三十七年度末には七億二〇〇〇万円であったのが、三十八年度末には一二億二〇〇〇万円、三十九年末には二五億七〇〇〇万円と増加し、四十年度末には二五億円となった」「四十二年末にはおよそ三〇億円の負債になるものと推計されている」と述べている。

このような本学の財政状況だから「学費改訂」が必要であるというのが、このパンフレットの結論である。そして、経常部支出の不足金の理由をもっぱら物価上昇と人件費の上昇で説明している。おもしろいのはこういった学費値上げ理由の説明とみなされるものが後で述べるように、本年度提出された経営改革委員会答申および、他の資料にみられる学費値上げの必要性を説く部分とほとんど類似していることである。このことはとりもなおさず大学当局の大学経営に対する態度が、この間ほとんど変わってこなかったことを示すものである。

注　本学の財政収支は経常部と臨時部に分けられている。支出を例にとれば、経常部支出は人件費・研究費・教育費・光熱費など消費的支出を指し、臨時部支出は設備投資・借入金返済・利子など資本的支出を指す。

本年度末で三八億の負債
ひっ迫した本学財政
当局資料、学費値上げを暗示

借入金の返済がさらに借入金を生む構造

四十一年以後の経常部収支の推移を表わした表（資料II）を見てほしい。四十二年度学費値上げの影響で、毎年二億円程度の増収を続けていた授業料収入も、四十六年度予算では横ばいどころか前年度より減少している。入学金収入も四十三年をピークにほとんど横ばい状態である。大学当局の論理は大口の収入増が望めないため、自然増による支出の増加に対して資金不足となるというものである。ここでいう自然増というのは、例によって人件費の上昇と諸物価の上昇である。このため四十六年度予算では二億五〇〇〇万円の借入金が計上されている。この点について、当局の資料は「四十二年度の学費改訂、四十三年度からの国庫補助等により増収をみてきたものの、四十四年度には早くも借入金の計上をみた。すなわち、前年比増収額についてみると、四十二年度と四十三年度は、その年度の支出増加額を大体カバーしてきたが、四十四年度は一億五三〇〇万円、四十五年度には三[illegible]円の増収をみたものの[illegible]における経費の膨張が前[illegible]年度二億六〇〇〇万円[illegible]度三億三四〇〇万円と増加し、そのため収入が支出に追いつけず、その不足分が赤字となって借入金に依存しなければならない状態となった」と述べているが、この解決策については「経常部において借り入れが行なわれると、適当な返済財源がない限り、その赤字は毎年繰り返して累増してゆき、その結果、負債の累計は驚くべき金額となる」というだけで「負債の累計が驚くべき金額」になりそうなときには学費値上げ以外に方法のないことを暗に語っている。

次に臨時部収支の四十一年以後の推移の表を見てみよう（資料III参照）。四十六年度の借入金も五億九四〇〇万円が計上されているが、資料によると四十五年末までの累積借入金は三一億三四〇〇万円（内 臨時部借入金は約三〇億円）に達し、これは四十一年末と比較して三億四七五〇万円増加している。さらにまた、四十五年度の場合、臨時部支出の最大額のものが借入金返済支出で、臨時部支出全体の四四%を占め、二番目が支払利息の支出で、全体の二〇%を占めている。これは四十五年の場合だけでなく、他の年度においても借入金返済と支払利息の二つの支出が臨時部支出全体の五〇%以上を占めている。

大学当局の資料においても、このあたりの事情を「四十六年度の予算執行に伴い、年度末の負債総額は経常部及び臨時部の合計で約三八億円（内経常部借入金は二億五〇〇〇万円）に達するものと見込まれる」と述べ、また「その結果、借入金の償還とそれにともなう支払利息は、毎年あわせて臨時部全体の五〇～六〇%（四～七億円）を占め本学財政を圧迫し、制約する要因となっている」と書いている。以上の資料が示す内容は本学の施設に対する設備投資が学費・維持費として入いる収入をはるかに越える借入金・学債でまかなわれてきたことであり借入金の累積の結果、利息の支払いと借入金返済のために同額以上の新たな借入金が年々必要になっていることである。大学当局の資料においてすら臨時部の収支見込を「四十七年度における収支不足額は一億四七〇〇万円になるが、四十六年度よりの累計が九億四一〇〇万円となり、さらに五十年度末の累計不足額は約一五億円に達することが予測される。これを四十五年度末の借入金残高三〇億円に加えたのち五十年度までの借入金返済額を差引くと、五十年度末の借入金残高は、臨時部だけで約三六億円と推計される」と述べている実情である。この計算の中には新規施設取得のための借入れ分は含まれていないことから、大学当局が新たな施設を購入、あるいは建設しようとすれば借入金はさらに増大することになる。

最も具体的な負債解消案＝学費値上げ

大学当局の発表している収支決算を見る限りにおいても、これまでの本学の財政が莫大な借入金を繰り返し導入する、悪循環の上で成り立ってきたことがわかる。前回の学費値上げを迫られた四十一年末と、四年後の四十五年末の財政状態のひっ迫の間にどれだけの改善が加えられているのだろうか。数字の上だけで見るなら、むしろ悪化しているのではないか。大学経営者にとって、四年周期の学費の値上げは経営の抜本的改善策がない限り、常に日程にあげられるものとして存在するだろう。経営当局にとっては、いかに反対勢力と大きな衝突を起こさないで値上げを実行に移し、財政上の不足金をまかなうかといった問題でしかない。そうである以上、学費問題を学生と話し合うといった発言をしてみたところで、全く欺瞞でしかないことを一番よく知っているのは経営当局であろう。ちなみに大学当局の資料は、四十七年以降の収支不足見込額に対して「財源補足の方法としては、第一に国庫補助の大幅な増額であり、第二に寄付金収入の飛躍的増大であり第三に収益事業について検討すること、第四に学費の改訂など収入増の対策として考えられよう」と述べているが、この四項目の中で最も実現しやすくかつ大幅な増収を期待できるのが第四項であることは言うまでもあるまい。

ここで注意しなければならないのは、すでに莫大な借入金をかかえた財政になってしまっているのだから学費値上げなどにも協力して、その後の安定した大学経営に向かって努力すべきだとか、学生・教職員・理事者が一体となって国庫補助の増加を求めるよう運動すべきだという議論である。こういった議論に欠落している点は、何故に莫大な借入金をかかえるような財政状態に陥ったかという問題の解明である。また国庫補助に関しては「中教審答申」に見られるように、現在政府がとろうとしている文教政策に対する明確な批判であり、社会において大学が、資本の要請に答えるような労働力としての人間に学生を教育する場としてあることとの認識である。もちろん一般的には、国庫補助の増大は望ましいことには違いない。

マンモス有名私大への道は負債の山

昭和四十年以降の本学の主要な新築施設には次の物件がある（各年度学事記録による）。

【四十年完成】本校十一号館▽生田第二校舎（工学部）一号館▽同二号館▽同三号館▽同四号館▽生田学生食堂▽和泉第三校舎▽和泉寮

【四十一年完成】駿河台学生会館

【四十二年完成】短大校舎（駿河台）▽神田守衛所▽和泉学生会館▽生田学生会館

【四十四年完成】堀切寮▽生田第二校舎（農学部）▽生田図書館

工学部が駿河台から生田へ移転したのは昭和三十九年である。三十九～四十二年はまさしく本学がマンモス私大としての陣営を整えた時期であった。本校における十一号館（商学部）、短大校舎、生田における第二校舎（工学部）、和泉第三校舎（農学部）、和泉第三校舎の完成はマンモス化した学生を受け入れるのに必要であった。また、駿河台学生会館、生田学生会館、和泉学生会館、和泉寮の完成も有名私大としての形を整えるためには不可欠なものであった。もちろんこの間には、学生の学館建設、寮の完備に対する強い要求と斗いがあった。だが、これらの施設の建設費はほとんど借入金でまかなわれ、その結果としての累積借入金の増大は当然のことであった。

この期間の大学施設の拡充は明らかに、本学がマンモス有名私大として生き残るためにあった。一方ではマスプロ教育として学生を増やしに増やし、他方では学生増に見合った施設の拡充を迫られた大学経営の結果である。まさしく営利主義的な経営の結果でしかない。しかし、それは資本の求めるような労働力を大量に社会に送り出すという、資本の要請にも沿ったものであった。生田における農工学部施設の独立は明確に資本の要請と一体として進められてきたものであった。

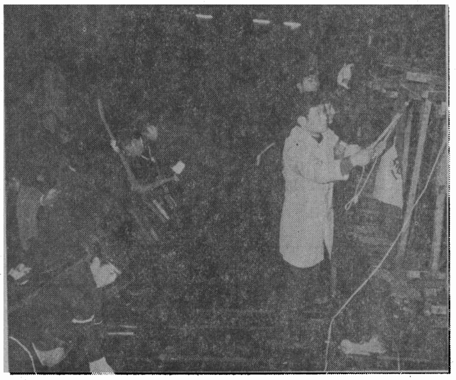
本シリーズは次回、四十二年度学費値上げ闘争を逐次追う中から、明大学費闘争を指導した論理、運動の質などを明らかにしてゆきたいと思います。御期待ください。

お知らせ

本紙一二七七号は、十二月三十日を冬期休暇中のため休刊とし、七二年一月六日を「新年特別号」として発行する予定です。なお、以下の号は、従来の週刊体制にもどり、平常通り発行致します。

我々編集部員一同は、これからも自らの日常性を問い、メディアの存在追求＝変革を目指すべく新聞発行にたずさわっていきたいと考えております。

これ以降も、読者諸氏のご支援とご批判とをお待ちしております。



スト反対派により破壊されるバリケード（四十二年）

四十三年一月三十日、大学院に機動隊導入

資料I

昭和42年度学費値上げ額

			値上げ額
○入学金			値上げ額
7　学　部		30,000	40,000
大　学　院		30,000	40,000
短　　大		25,000	40,000
中・高　校		20,000	40,000
○授業料			値上げ額
7　学　部	（文科系）	50,000	80,000
	（工学部）	70,000	115,000
大　学　院			
修士課程	（文科系）	50,000	80,000
	（工学部）	70,000	115,000
博士課程	（文科系）	60,000	90,000
	（工学部）	80,000	125,000
短　　大		36,000	66,000

注：農学部は文科系に含む

資料II

経常部収支の5年度推移（決算額）

（収入）　（単位千円）

年度	41	42	43	44	45	46（予）
授業料	1,623,987	[illegible]820,414	2,037,220	2,187,653	2,416,462	2,396,370
入学金	286,053	343,612	361,433	350,267	358,140	357,860
入学試験料	317,587	326,868	359,531	319,518	378,298	314,100
国庫補助金			75,000	75,894	178,952	300,000
借入金	142,815			93,000	45,000	250,000
その他	211,402	242,463	228,315	280,776	280,799	315,838
計	2,581,844	[illegible]733,357	3,061,499	3,307,108	3,657,651	3,934,168

〔注〕その他＝実験実習費，教育実技費，財産収入，退任給引当金繰入等

（支出）　（単位千円）

年度	41	42	43	44	45	46（予）
人件費	1,970,935	129,099	2,287,507	2,571,567	2,838,990	3,133,550
研究経費	86,614	98,900	107,322	100,113	120,835	140,510
学生関係経費	163,287	172,831	189,140	181,428	172,527	166,617
図書費・備品費	66,035	62,393	90,742	81,719	98,754	112,500
一般経費	280,134	262,017	268,863	268,501	306,827	345,440
小計	2,567,005	725,240	2,943,574	3,203,328	3,537,933	3,898,617
その他	14,837	8,117	117,925	103,780	119,718	35,551
計	2,581,842	733,357	3,061,499	3,307,108	3,657,651	3,934,168

〔注〕その他＝次年度繰越金特別諸費，臨時部繰出金，予備費

資料III

臨時部収支の過年度推移（決算、繰込予算部を含む）

（収入）　（単位千円）

年度	41	42	43	44	45	46(予)
学園費・維持費	358,497	360,447	360,736	364,018	360,948	201,100
寄付金	4,946	1,717	7,164	557	2,822	10,000
国庫等補助金	32,684	45,785	132,078	63,320	46,110	55,830
学債	117,200	82,250	105,200	276,250	132,100	200,000
借入金	293,323	193,797	607,439	248,600	182,016	594,000
その他	0	5,242	0	127,974	101,255	20,000
計	806,650	689,238	1,212,617	1,080,719	825,251	1,080,930

〔注〕その他＝固定資産売却代金収入，剰余処分金受入等

（支出）　（単位千円）

年度	41	42	43	44	45	46(予)
土地・建物取得費	241, 24	138,657	209,464	193,827	236	240,200
設備費	113,791	133,528	119,694	104,799	110,365	126,240
改修費	44,880	77,984	127,252	83,232	151,161	178,600
支払利息	130,476	137,618	120,001	189,721	165,732	166,205
借入金返済	276,479	201,451	636,206	417,159	363,334	354,220
その他	0	0	0	91,981	34,423	15,465
計	806,650	689,238	1,212,617	1,080,719	825,251	1,080,930

〔注〕その他＝借入関係諸経費，予備費

幻想的な
明るい
雰囲気の店内で
お茶から お食事まで
どうぞ

営業時間
AM9：00～AM4：00

コーヒー（1ポット）　220
ミックルピッツァ　450
スパゲティミートソース　450
アンティーパーストサラダ　350

カフェラン シエラザード

西部新宿駅前　新宿スタッセビル6F　TEL (209) 6971

落ちついた雰囲気と豪華なインテリア

午前10時より営業及び
ご予約を受承ります
TEL (209) 6971

サービスタイム
午前10時より5時まで
ゲーム代…1時間 ¥100
席料お一人様 ¥500（5時間）

本営業
午後5時より11時まで
ゲーム代…1時間 ¥100
席料、お一人様 1,500（5時間）

麻雀荘 三国史

西部新宿駅前　新宿スタッセビル6F　TEL (209) 6971